
すれ違いのようで

福嶋航大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すれ違いのよう

【Nコード】

N9183G

【作者名】

福嶋航大

【あらすじ】

幼馴染の3人、純人、くるみ、志恵。付き合って2年になる純人とくるみの間にある日亀裂が生じてしまう。2人から相談を受けてどうにかしたいと思う志恵。そんなとき、下校中志恵がふと見上げたビルに2人の関係ぜひご相談くださいとの見覚えのない文字が。不気味に思うも志恵は足を踏み入れる。そこで出会った不思議な男、そして受け取った不思議な箱……。その箱の中身とは……。志恵は思い切った行動に出る。

第1話

1 待ち合わせ

今日もいつものように教室には日差しが暖かい。

外にはすっかり葉を落とした木々が冬の厳しい寒さに震えている。

くるみはその日差しを背中いっぱいに受けられるいつもの特等席に座っていた。

くるみのお気に入りだ。

「じゃあ今日の授業はここまで。」

「起立、注目、令。」

「ありがとうございました。」

数学の授業が終わり、同時にくるみの心地よい夢も終わった。

くるみは眠りから覚めたばかりの重い瞼を擦ると健吾との待ち合わせの時間を確認にした

後、ゆっくりと席を立ち秋橋駅へ向けて歩き出した。

「おようなら。」

ホームルームを終え、純人は窓の外に目を向けた。外は眩しいくらいに晴れており、純人は

その日差しに目を細めた。純人はそのまま右腕の時計に目を落とすと急いで教室を出た。

今日は綾花との約束の日だ。純人は綾花との待ち合わせ場所、秋橋駅へと向かった。

2 はじまり

半年前

「志恵ちよつと聞いてよ。」

窓の外では蝉が鳴きやむことを知らないかのようにづるさく鳴いているなか、こちらも黙る

ことを知らないかのようにざわついている教室の片隅でくるみは志恵に話すのも嫌そうな顔つ

きで言った。

「どつしたの。そんな顔して。」

志恵の態度はいつでも優しい。今まで一度として周りに嫌な顔をし

たことは無く、クラスの

中で誰からも一番の信頼を寄せられる存在であった。

「純人ったら、私に内緒で歩美とデートしてたんだよ。私昨日さ、帰るとき見ちゃったんさ。」

二人で仲良く歩ってるよ。」

くるみは興奮気味であり、同時に呆れているようでもあった。

「なんかの勘違いじゃないの。もう二年も付き合ってるんじゃない。だいち、純人と歩美は中

学校の頃から仲良かったしさ。たまたま会ったとかそんなだって。」

志恵はいつものように冷静だが、くるみはそんな志恵を横目に、

「でもさ、私もそう思って昨日純人に聞いてみたんだよ。そしたら純人部活終わったらそのまま

ま家に帰ったって言うん。途中で何もなくて帰ったって。普通隠すよ。うなことがないんなら正直

に途中で会ったって言うんじゃない。」

「うーん・・・」

志恵がくるみの勢いに圧倒されているとチャイムが鳴り次の授業の開始を知らせた。

くるみは困惑する志恵に、

「私、純人が謝らないと絶対許さないからね。」

と言い残して席に戻った。

「起立、注目、令。」

「さようなら。」

今日のすべての授業が終わり、部活の用意をしたり、急いで飛び出して行ったり教室内は再び

ざわつきを取り戻した。

「どうしたらいいんだろう。よく分かんなくなってきた。じゃあまた明日ね。ばいばい」

い。」

くるみは志恵に軽く笑うと教室を後にした。

志恵もいつものようにまた明日ね、とくるみに軽く笑って返した。

第2話

3 雑居ビル

「お疲れさまでした。」

志恵が部活を終えると時計の針は九時を回っていた。

周りは暗く何も見えなかったが、志恵が徐に空を見上げると、

空一面に広がる星たちがみな楽しく何か話しているかのように輝き合っているのが見えた。

志恵はホッと一息つくと学校を出て家へと足を進めた。

その帰り道、志恵の頭の中はくるみのことではいっぱいだった。

くるみも純人も志恵の幼馴染であり、

幼稚園から小学校、中学校とずっと変わらぬ親友であり続けている。

だから志恵はくるみと純人をどうしたら仲直りさせることができるかと考えていた。

そうしているうちにいつものコンビニを通り過ぎ、

いつもの帰り道をただひたすらに考えながら歩いている時、志恵は

ふと空を見上げた。

相変わらず星たちが語り合っているのが見える。

「わたしみたいに悩んだりもするのかな……。」

志恵はそんなことを思いながらまた前を向き直した。

その途中、志恵の目にふと何かが映りこんだ。

それは道端にひっそりと建つ雑居ビルだった。

いつもなら何とも思わないで素通りをするただの閑散としたビルである。

志恵はその雑居ビルに改めて目を向けた。

志恵ははっとした。

そこには、

二人の関係ぜひご相談ください

との文字がぼんやりと浮かんでいた。

「あんなんあつたけな……。」

志恵はこの文字に目を疑うのと同時に不思議な感覚を覚えた。

毎日通っている通学路なのに、この文字は一度として目にしたこと
がなかった。

確かにいつもは何とも思わずにただ前を素通りするだけだからかも
しれない。

しかし、少なくとも今日の朝通った時にはなかったと志恵は確信で
きた。

だがその確信を裏切るかのように、

その文字には今日のうちに新しく書かれたというような新鮮さや清
潔さはどこにも見当たらない。

志恵は少し気になったものの、それ以上に不気味に感じ止めた足を
また家へと進めた。

第3話

4 文字

「お母さん、行ってきます。」

志恵は玄関を出ると朝の空気をいっぱいに吸い込んで深呼吸をした。志恵の日課だ。

「うーん、やっぱり夏の空気はおいしくないな。」

志恵は少し顔を歪め、学校へと歩き出した。

その途中、志恵は昨日の帰りに見たあの文字のことを思い出した。

雑居ビルに書かれていたあの文字だ。志恵は足を速め雑居ビルへと急いだ。

9

あまり長居はできないがあこの文字だけでも確認できればと思った。

志恵は気づくと走り出していた。

ビルまでは遠くなかったが志恵が前に立った時には呼吸は速く、浅いものだった。

志恵はゆっくりと呼吸を整えた後、ビルを見上げると呆然とした。

そこには昨日志恵が見たような文字はどこにもなかったのだ。

志恵は信じられなかった。

「昨日は部活でいつもより疲れてたし、くるみのことでも悩んでたから見間違っただろかな。」

志恵は信じられないと思いつつも昨日見た文字は自分の勘違いだったと考え、

また学校へと歩き出した。

「志恵おはよ。」

「あつくるみ。おはよ。昨日なんかあった。」

「ううん、なーんも。あたしからはもちろんなんもしてないし、向こうからなんてごめんの。」

「言もなし。」

「もちろんって。」

志恵はくるみに呆れたような顔を見せながらも、心配でしかたなかった。

・・・ブーブーブー

担任が教室に入ってくるのとほぼ同時に志恵の携帯が震えた。

第4話

5 メール

「起立、注目、礼」

「おはようございます。」

「はい、おはようございます。」

「着席。」

ガチャガチャといすの音を立てながら今日もいつもと変わらない一日が始まった。

「今日もみんな元気で来てるか。出席とるぞー。はい、いないやつ手挙げる。」

これもいつものこと。つまらないジョークに担任だけ笑い、生徒全員が呆れた顔をする。

「って無理か。今日もみんな元気だな。今日も一日頑張ろう。」

担任が教室を出て行くと、教室は賑わいを取り戻した。

志恵は携帯を開いた。

「あつ。メールだ。」

志恵は少し驚いた。志恵にメールを送る人はほぼ決まっている。

母、妹、そしてくるみ。しかし、このメールは違った。

「新井君だ。……くるみのことかな。」

そのメールは純人からだった。

「お待たせ。遅れちゃってごめんね。」

「全然大丈夫だよ。」

その日の放課後、志恵は純人に呼び出された。

二人はお互いの通学路がちょうど交差する角にある小さなファミリーレストランに入った。

「どうしたん？」

「もしかして、もおくるみから聞いてる？」

純人は志恵の様子をうかがいながら言った。

「うん、聞いてるよ。」

純人の申し訳なさそうな態度に志恵も合わせるようにゆっくりと返

した。

「あいつ、なんて言ってた？」

志恵は素直にくるみから聞いたままのこと隠すことなく純人に説明した。

志恵が話している間純人は相変わらずの表情で志恵の話をただただ頷きながら聞いていた。

「・・・それで？」

少しの沈黙の後で純人は口を開いた。

「それでって、もう終わりだけど。」

志恵がこれ以上はないということを純人に告げると純人の表情が

今までの控えめなものから強気なものへと変わった。

「あいつ、ほんとにそれしか言っていなかったんか？おれがちゃんと謝ったとかは？」

「ううん、そういうことはなんも言っていなかったよ。」

さっきも言っただけど、新井君からはごめんの一言もないって。」

「くるみのやつ・・・。」

「あっ、ちょっと待って。」

志恵は純人の感情の高まりを感じ、咄嗟になだめようとしたがすでに遅かった。

「そおか。西島さん、いろいろ迷惑かけてごめんね。」

おれくるみから連絡来るまで連絡もなんもしないって今決めた。」

「ちよつとそんなこと・・・。」

志恵が話している途中だったが純人は伝票を片手に慌ただしく席を立った。

志恵も急いで付いて行った。

「今日はありがとう。わざわざ時間とらせちゃって悪かったな。気をつけて帰ってね。」

「ううん。気にしないで。ありがとう。」

「私いけないことしちゃったかな・・・。」

私のせいで仲直り出来たものも出来なくなっちゃったかな・・・。
どうしよう。」

その帰り道、志恵は自分はどうすれば良かったのかとひたすらに考えていた。

その時、ふと志恵の頭の中にあの看板のことが頭に浮かびはっとし

て立ち止った。

そこはちょうど昨日の夜あの看板を見た雑居ビルの前だった。

第5話

6 謎の男

志恵は少しの間そのまま立ち止まったままだった。

どれくらいの時間が流れただろう。

志恵は呆然と雑居ビルの一室にぼんやりと浮かぶ看板を見つめていた。

「やっぱり、勘違いじゃなかったんだ。」

志恵が見つめているその先には間違いなく

二人の関係ぜひご相談ください

との文字がぼんやりと浮かんでいた。

志恵は息をのんだ。

「どっしりよ。絶対怪しい……。」

志恵は昨日の夜はあったが、今日の朝は無く、

そして日が落ちた今日の夜にはまた現れたその看板に不気味さを強く感じた。

しかし、どこか引き込まれ、不思議と自分の悩みが解決するような不思議な気持ちになった。

「このまま自分だけで悩んでも何も変わらないな。よし……。」

志恵はその看板が掲げられている四階まで一段一段ゆっくりと上がっていった。

その足取りに不思議と抗うものはなく、むしろ普通に歩いている時よりも軽いものだった。

「あたし今、階段上ってるんだよね……。」

志恵は階段を上っているという感覚をあまり感じられないことを不安に思いながらも

くるみと純人のためにと四階まで一段一段数えながら上り続けた。

志恵は二階を過ぎ、三階を過ぎ、ついに四階へとたどり着いた。

四階へと上がると志恵の目の前には何も書かれていない無機質な扉が一つあり、

その奥にはぼんやりと明かりがついていた。どうやら会社名などというものは無いらしい。

「ここだ・・・。」

志恵は重く息をのんだ。

その瞬間、急に体が重くなるのを感じた。

簡単には動けなかった。

どれくらい立っていたのだろう。志恵が気づくと不思議とドアが開いていた。

「開いてる……。」

志恵は部屋の中へと足を進めた。

今まで志恵の中にあつた不安は不思議と薄れていた。

「すみません。」

声はすんなりと出たが、明らかに震えていた。

志恵はその場で返答を待ったが、返答はなくあたりは物音一つしなかった。

少し奥をのぞいてみるとぼんやりとした光が見えた。

しかし部屋の中はそれだけで人がいるような気配は全くない。

志恵は引き返すことも考えたが勇気を振り絞って部屋の中へと足を

進めた。

コツン、コツン、コツン……

静まり返った空間の中にはひたすらに志恵の足音のみが響いていた。

志恵はさらに奥へと足を進め、ちょうど入り口で見たぼんやりとした光の手前に来たとき、

静かな男の声が静寂を破った。

「とびつぞ、こちらへ……。」

「……………」

志恵は息を飲んだ。

今まで部屋中に重く張り詰めていた空気が一気に志恵の肩にのしかかってきたようだった。

志恵はその場で足を止めるしかなかった。

「さあ、どうぞ座ってください。」

男の声は不気味なほど低く、また落ち着いており紳士的であった。

志恵はその声に不思議と安堵できるものを感じつつ、

男に言われるままぼんやりとした光だけを頼りに手探りで腰をかけた。

第6話

7 二つの箱

おそらく志恵は男の前に座ったのであろう。

しかし、目の前に誰かがいるという感覚は全くなかった。

ただ暗闇の中に手元だけひとつぼんやりと照らされた空間の前に座っている。

そんなところだ。

「あ……………」

志恵は何も見えない中で暗闇に話しかけた。

「どのようなご用件ですか。」

男は相変わらずの落ち着いた声で答えた。

志恵は背筋に何かが走るのを感じた。

今自分の目の前には間違いなく人がいる。そう思うと志恵は怖かった。

「表にあつた看板を見て……。」

「ほう。看板をね。それで。」

「私じゃないのですが、友達が……。昔からずっと仲良くて、ずっと仲良しなのにこんなち

よつこのことで壊れちゃうなんて私耐えられなくて……。」

志恵の口は不思議とすらすらと動いた。

志恵が話終わると男はかすかに微笑んだ。

「あなたは優しいんですね……。」

男の声はなぜか何かを必死に堪えているような声だった。

「どうかしましたか。」

志恵が不思議に思っていると思っていると目の前の光の中に何か光ったような気がした。

テーブルの上にはぽつんと一滴の跡があった。

「あ……。」

「いや、なんでもない。」

男は志恵を遮るように言った。

志恵の背筋に再び何かが走った。それからしばらく沈黙が続いた。

何か話し出せるようなそんな雰囲気ではなかった。

「これを。」

何の前触れもなく突然の男の声に志恵は驚いた。

志恵は視線をテーブルに落とした。

「これは……。」

テーブルの上には無機質な小さめの箱が二つ置かれていた。

外見からは中身は想像できない。

「あなたに差し上げます。お持ち帰りください。」

「お金は。」

「そのようなものは一切いただきません。さあ、どうぞ。」

「はあ、ありがとうございます……。」

志恵は自分の目の前で今何が起きているのか理解できなかったが、

目の前に出された二つの箱を持って帰らなければいけないという
とははつきりとわかった。

志恵は二つの箱を手にとると部屋を後にした。

志恵は階段を降りると、再び雑居ビルの前に立った。

手の中には男から貰った箱が二つしっかりと抱えられている。

志恵はそのままビルを見上げた。

「あれ……。」

すると、ついさっきまで自分がいたはずの三階部分に

今の今まであったあの看板はなく真っ暗だった。

「ぎゅんぎゅんと……。」

志恵は目の前の現実を受け入れられなかった。

志恵は必死で階段を駆け上がっていた。

「おかしい。こんなことあるはずがない。」

三階まであがるのに時間はかからなかった。

志恵は言葉を失った。

さっきまでいたはずの部屋のドアには空室の張り紙がされており、

ドアにはしっかりと鍵がかかっていた。

「ぎゅんぎゅんと。」

空室の張り紙がされた無機質なドアの前で志恵は呆然と立ちすくす
しかなかった。

志恵の頭の中にはそこからの先の記憶はない。

そして、次に志恵が気づいた時、目の前には見覚えのある天井が広
がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9183g/>

すれ違いのようで

2010年12月1日12時13分発行